
とある野球少年の異世界目録

澄風

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある野球少年の異世界目録

【Nコード】

N0565BA

【作者名】

澄風

【あらすじ】

エクスリーグの世界大会決勝戦後に起きた真の最終決戦から数年元ビクトリーフィンチーズのエース・小波栄一は年下の恋人・天月紗矢香と共に学校へ登校していると、路地でガンダーロボとその持ち主であるカメラと出くわす。運が悪く時空転移に巻き込まれた二人が辿り着いた次の世界、そこは学園都市と呼ばれる超能力者を育成する場所だった。

プロローグ（前書き）

作者はド素人です。独自解釈やキャラの性格が違ったりするかもしれませんが、この世界は無限にある平行世界の一つ何だと思ってください。

プロローグ

エクスリーグ世界大会決勝戦後にあつた真の最終決戦から数年。

俺こと小波栄一は高校生になり、今も大好きな野球を続けていた。

世界一の野球選手になるという夢を叶えるべく現在はフィンチーズで一緒だった幾人かの仲間たちと共に、高校球児全員の夢の舞台である甲子園を目指して猛練習に励んでいる。

そして今日も俺は朝早くから目を覚まして野球の朝練へと向かおうとしていた。

「それじゃあ、行つて来るよ！ 湯田父さん！ 山田父さん！ 落田父さん！」

玄関で運動靴を履きながらリビングの方へ挨拶をすると、俺が父さんと呼ぶ眼鏡を掛けた三人の中年男が姿を現す。

エプロンを掛けた母親代わりの湯田が、

「行つてらっしゃいでやんす！」

ワギリ製作所の黄色いヘルメットに水色の作業着姿の山田が、

「車に気を付けるでやんす！」

兄貴分とも言える迷彩柄の軍服姿の落田が、

「帰ったらオイラが造った新たな特訓用具を試すでやんすからね！」
元気な声でいつも俺を見送ってくれる三人の父親に手を振って答え
ると、いつも通り俺は鞆などの荷物を持って走り始める。

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

俺の家は町から遠く離れた山奥にある。

家を建てた三人の父親曰く『秘密基地は男のロマンで昔からの夢だ
つたでやんす！』との事だが、山奥に建っている故に町までかなり
遠い。

幼い頃から自転車などを使う事を禁じられており、ずっと走って通
学するせいで今では慣れて信じられない位にスタミナが付いている。
慣れた坂道を走って下り、いつも通り練習に間に合う様に走るペー
ス上げて調節していると、学校の近くにあるコンビニの前で一人
の少女を見つけた。

まだ中学生位で、背に流れる紫がかかった長い黒髪に大きく澄んだ涼しげな瞳。

可愛いというよりも美人という言葉が相応しい秀麗な顔立ちで、清楚な神桜女学院中等部の白と青のセーラー服姿は、今では絶滅寸前と言われている大和撫子を思わせる。

「紗矢香！」

小波に名前を呼ばれた少女・天月紗矢香はこちらに気付くと物静かそうな雰囲気とは打って変わって、可愛い笑顔で浮かべてこちらに走って来る。

長年の付き合いで次にどうなるのか知っている小波は苦笑しつつ両手を広げ、

「栄一さん！」

抱き付いて来た紗矢香を抱きとめた。

「おはよう、紗矢香」

「おはようございます。栄一さん！」

笑顔で挨拶をし合う二人。

その姿はどう見ても恋人同士にしか見えない。

実際に二人は両親公認の三歳離れた恋人同士である。

つい最近までは「お兄ちゃん」と小波を呼んでいたが、今では「お兄ちゃん」では恋人らしくないという理由で「栄一さん」と呼んでいる。

「こんな早朝に会うなんて珍しいね」

「はい！栄一さんと会えるなんて早起きして良かった〜」

体を離して向かい合い、両手を頬に当てて赤らめながら嬉しさを表す紗矢香。

その仕種は山田父さんが働いているワギリ工場の浅井漣を思わせる。

「今日も野球の練習なの？」

「うん、まあね。夏の大会も近いし」

「野球部のエースだもんね。甲子園・・・必ず応援に行くから！」

「気が早いよ、まずは地区大会の強豪に勝たないといけないからな」

同じ地区にいる暁大付属の井石遼の事を思い浮かべる。

嘗て世界で一番最初に魔球を投げた小波に対して、世界で三番目に魔球を投げた井石は当初、小波にライバル宣言してきた自称ライバルであったのだが、とある事情で小波が所属していたフィンチーズに加入して共にチームの主力としてフィンチーズを世界一へと導いた男である。

小中で果たせなかった雪辱を果たすべく彼は小波とは別の高校へと

入学している。

間違いないく地区大会で立ちはだかる壁となるであろう事を彼の實力をよく知る小波は予感していた。

そんな小波を見て紗矢香は笑顔で、

「絶対大丈夫だよ！だって栄一さんは世界一の投手なんだから！」

「ありがとうな、紗矢香。それじゃあ学校の近くまで一緒に行こうか」

「うん！」

小波は時間を確認すると歩き始め、その後を紗矢香は並んで歩く。

「それにしても今の世界は平和だよな、三年前にあんな事が遭ったのじ」

三年前に起きた謎の現象を思い返して咳くと、紗矢香も頷く。

「あんな事は二度と起きない方が良いに決まってるよ。でも何事も突然始まるものだからね・・・」

「それもそうだな」

二人並んで他愛の無い会話をしながら歩き、別れ道まで来た所で二人は立ち止まる。

「それじゃあ私はこっちだから・・・」

「うん、気を付けてね」

「はい。栄一さんも頑張ってください!」

紗矢香と別れ、彼女が道角を曲って見えなくなると小波も時間を確認して遅れを取り戻すべく走り出そうとした瞬間

「きゃあああああつ!!」

「紗矢香!?!」

彼女の叫び声が聞こえて小波は彼女が向かった方へと急いで走る。

「紗矢香!?!どうした」

思わず小波は言葉を失った。

尻餅を付いている紗矢香も同様である。

二人が道角を曲がって目撃した物、それは つ!?!?

「が、ガンダーロボだとく!?!」

そこには小波の父親達が大好きな夢の巨大ロボが倒れて道を塞いでいた。

「え、栄一さん!?!」

尻餅を付いていた紗矢香が立ち上がって不安そうな顔で小波に駆け

寄り、彼は彼女をいざとなったら守るべく前に立つ。

「何でこんな所にガンダーロボがあるんだ？」

「もしかしたら私の能力が関係してるのかも………？」

「それは分からないよ。……とりあえず調べてみるか………」

巨大ロボットを警戒しながら二人はジリジリと近寄る。

すると頭部のコックピットらしき場所のハッチが開いてダースベイダーみたいなコスプレをした一人の中年眼鏡男が現われた。

その男の姿を見た瞬間、二人は思わず言葉を失った。

出て来た人物が小波の父親達にそっくりだったからだ。

「イタタタタ……酷い目に遭ったでやんす」

「やんすって……やっぱり父さん達の親戚か？」

「そうじゃないのかな？口調も姿もそっくりだし………」

頭を押さえてフラフラとしている男は何か酷い目にでも遭ったのかげっそりとしており、周りを見渡すと二人にようやく気付いた。

「ちょっと聞きたい事があるんでやんす。ここは何処でやんすか？」

「ここは神桜女学院の近くですけど……それが何か？」

男の質問に紗矢香が答えると、男はうんざりした様に大きな溜息を付いた。

「今度の世界は地球の日本でやんすか・・・」

「今度の世界って事は・・・おじさんはもしかして異世界の人なのか？」

「むっ！？オイラはおじさんではないでやんす！時空の覇者カメダでやんす！」

「その時空の覇者がガンダーロボに乗って何しに来たんだよ？」

「クククク、勿論世界征 じゃなくて新型のダブルオーガンダーのテストでやんす」

「今明らかに世界征服って言おうとしたよな、紗矢香？」

「確かにそう言おうとしてたね」

明らかに怪しすぎるカメダをジト目で睨む二人は、カメダがいつどんな行動が起こそうとも対処が出来るように準備する。

そして新たな世界での世界征服計画につまづきつつあるカメダは内心焦りながらもどうするか考える。

（仕方がないでやんす。たかが小僧と小娘如き口封じするでやんす！）

ポケットに手を突っ込んで二人に見えない様に遠隔操作のリモコンを握り締めて迎撃ボタンを押す。

ダブルオーガンダーの黄色い複眼センサーが光を宿した瞬間
それに気付いた小波はボールを振り被ってカメダへと投げる。

「ライティングボール！」

投げたボールは雷光を放ち、明らかに人間ではありえない球速でカメダの腹部に直撃する。

「うっ！？でやんす……………」

カメダのダースベイダーみたいなボディーマーを粉碎してガクツと俯いて気絶すると、ボールはダブルオーガンダーのコックピット内に転がる。

「やり過ぎじゃないかな？」

「大丈夫だろ、軟球で手加減もしたし」

気絶したカメダを心配そうに見つめる紗矢香を安心させる様に言うと、小波と紗矢香はコックピットに近付いて入る。

「怪しきは罰せよって落田父さんから言われてるからね」

「私も一応能力を使って、この人がドジを踏む様に確率を操作してたから大丈夫だと思うけど……………」

気を失っているカメダのポケットからリモコンを取り出した小波は

身体をシェイクされた様な気分の悪さと共に小波は目を覚ました。

最初に視界に入ってきたのは見知らぬ天井とこちらを覗き込む様に見ているロボットとバツタ人間。

ロボットの方は人型で昔の子ども受けアニメに出てくる様な、いかにもって感じの古臭いデザインをしており、顔の部分には単眼センサーと口のみがある。

そしてバツタ人間の方は緑色のライダースーツに黄色のスカーフという格好をしており、真正銘のバツタ顔の額にはV3と文字が入っている。

「お！起きたみたいだな坊主！」

ロボットが人間並みに饒舌に話しかけてくる。

「そうみたいでバツタ！博士に知らせてくるでバツタ！」

バツタ男が親しみのある笑顔で言うと、ドアを開けて部屋から出て行く音が聞こえた。

「……………ここは一体……………そうだ紗矢香は!？」

全てを思い出して勢いよく身体を起こすがロボットに押し倒される。

「まだ調子が悪そうだから寝てる。お前と一緒にいたお嬢ちゃんなら隣の部屋で寝てるぜ」

「そ、そうか……………良かった」

ロボットに彼女の安否を聞かされてほっとすると、小波は何が起きたのか聞く事にした。

「色々と聞きたいんだけどいいか？」

「おう！答えられる範囲でならな！」

「ここは何処なんだ？」

「ここは学園都市と呼ばれている場所の第7学区にある黒野研究所だ」

「学園都市？」

聞き覚えの無い単語に小波は首を傾げる。

「簡単に言えばここはお前さんが居た世界じゃなく異世界なんだよ」
話して聞かせるよりも見せた方が早いと踏んだロボットは、ハンド型マニピュレーターで起用にカーテンと窓を開けて外の世界を見せる。

そこでヒカルが見たのは、自身が住んでいた場所とは比べ物にならないほどの巨大都市だった。

今小波がいる場所は高いビルの上らしく、学園都市が遙か彼方まで見渡せる。

「ま、ようこそ学園都市へ」

ロボットが肩を竦めて言うが、小波はこれからどうしよう、と頭を
押さえて悩んでいた

プロローグ（後書き）

現在作者はパワポケシリーズを始めからやり直しています。思えば14年間長かったな。

第1話 超能力 (前書き)

色々と言いたい事が多いと思いますが。パワポケキャラは出来るだけ出したいです。

第1話 超能力

学園都市

東京西部に位置する完全独立教育研究機関。

あらゆる教育機関・研究組織の集合体であり、学生が人口の八割を占める学生の街にして、外部より数十年進んだ最先端科学技術が研究・運用されている。

また、薬物投与・催眠術・電気刺激など人為的な超能力開発が実用化され学生全員に実地されている。

東京都のほか神奈川県・埼玉県・山梨県に跨る完全な円形の都市で、その総面積は東京都の約三分の一に相当し、総人口は約230万人。それぞれ特色のある23の学区から構成されている。

その内の一つである第7学区に悪の天才科学者、黒野鉄斎の秘密基地兼研究所は在った。

とある高いビル一つをそのまま改造しているらしく、ビルの中は研究施設に居住区や倉庫などがあり、メインの秘密基地は地下に在る。

そこで目覚めた二人は秘密基地の主と仲間に対面していた。

されて最後に始末されるのがオチじゃったから一か八かこやつらと一緒に賭けてみたんじゃ。そして門を抜けた先に出たのが学園都市だったんじゃよ」

当時の事を思い出しているのか、物憂げに黒野博士は緑茶を飲むと溜息を付く。

隣にいるロボット・たかゆきも同じ様に溜息を付いている。

どうやらよっぽど悲惨な状況だったらしい。

「俺はこちらに来てから生み出されたから当時の事はよく知らないでバツタ」

元の世界の事をあまり知らないバツタ人間・立花ボボV3は呑気に急須にお湯を入れて湯呑みに緑茶を足している。

何も知らないのは幸せな事だというのは本当みたいだな、と小波は気楽そうにしている立花を見て思った。

「三年前って言ったら、確かブラックホールズ戦があった時だよ」

三年前に起きた超常現象をよく覚えている紗矢香は当時の事を思い出しながら当時の真相を知る小波に聞くと、彼も真剣な表情で頷く。

「多分そうだと思うよ。当時ジャジメント会長のジオット・セヴェルスがドリームマシンを使って現実をフィクションに侵食させようとカタストロフを起こした時期だからな。その時に色々なアニメや漫画の世界と俺達の世界が繋がっちゃったんだよ」

当時の事を詳しく小波は三人に話す。

当時の事は『運命の三時間』と呼ばれ、今でも語り草となっている。世界中にアニメや漫画などにしかない怪物が出現して大惨事が起きた。

だがそれを食い止めたのは名も知れぬヒーロー達と子供達だった。

表では当時十二歳だった小波がエースを務めるビクトリーフィンチーズが世界大会決勝戦後に行われたフィクション達の連合チーム、ブラックホールズに勝利し。

裏ではブラックや茨木和那を中心としたヒーローチームがカタストロフの源であるドリームマシンを破壊するべくジャジメントの拠点に乗り込んで、ジャジメントの精鋭であるホンフーやエアレイドを打ち破り、何とかドリームマシンの破壊に成功した。

そしてジャジメント会長であるジオットは、小波がブギウギ商店街で知り合った謎のヒーロー・レッドとの一騎打ちに敗れ、カタストロフの頓挫と共に世界から姿を消した。

現実を生きる子供達がフィクションを打ち負かす事で人々の想いと現実の修正力が勝り、フィクションは消え去ったからだ。

そして当時魔球を投げる小学生として有名だった小波と井石は魔球や魔打法を失ってごく普通の野球児に戻った筈だったのだが……

何故か小波はまた魔球などが扱えるようになってしまった。

ホンフーやヒーローなど色々な人に相談してみたら、当時世界中で魔球や魔打法が扱える子供が現われたのはドリームマシンの力によるものらしいが、小波が魔球を投げたのはドリームマシン発動前であつた事が関係しているらしい。

つまり小波の力は生まれ持つた天然物だつたからだとか……。

「……ふむ。外でそんな面白い事があつたとは一生の不覚!! こちらの世界もそれなりに楽しいが、ワシも科学者の一人としてそれほど超常現象を是非この目で見たかつた!!」

語り終えて沈黙が流れているところを破つたのはやはり黒野博士だつた。

ワナワナと震えていた所を突然立ち上がり、拳を握り締めて残念そうにしている。

「黒野博士、一応オレっち達もその超常現象で此処にいるんだぜ」

「それでバツタ! こちらの世界にはもつともつと凄い事があるかもしれないでバツタ!」

「それもそうじゃのう」

仲間二人に慰められて落ち着いた黒野は腕を組んでソファアに座る。

「それよりも私達は元の世界に帰れそうなんですか?」

一番聞きたい事を紗矢香は不安そうに尋ねる。

小波も紗矢香も元の世界に家族や友人が大勢いる。

こちらと向こうの時間の進み具合などは分らないが、もしこちらと同じ様に時間が進んでいるのなら大騒ぎになっているだろう。

そんな二人の不安を消し去る様に黒野博士は胸を張って自信満々に答えた。

「それについては心配ないぞい！お前さん達と一緒にやって来たメガネ坊主の技術とこの学園都市の技術にワシの頭脳が合わされば、元の世界に必ず戻してやる！」

「本当ですか!？」

「やったね！栄一さん！」

元の世界に戻れるという希望を貰って小波と紗矢香が喜び合って抱き合う。

その様子を見ていたたかゆきと立花が温かな眼でよかつたなどと言うと、黒野博士はこれからの話を始めた。

「さてと、まだ上で寝てるメガネ坊主は後にして、お主らはこれからしばらくこの学園都市で暮らさねばならぬから、色々やってもらう事がある」

「何ですか?」

「日用品の買い物と能力検査でバッタ！」

「それと学園都市だからお前さんらは学校に通わなきゃならねえんだよ」

二人の疑問に答えたのはたかゆきと立花だった。

「お前さんらはまだ高校生と中学生じゃろうが。戸籍の方はワシ自身学園都市のトップとパイプがあるから何とかしてやるが、この街で若者が学校に通っていないのは色々と厄介な問題になる事が多い。じゃからお主らはこれから能力検査を受けて学校に通ってもらう。能力の方は二人共最初から生まれ持つておるようじゃからの問題あるまい」

ソファーから立ち上がると全員でエレベーターに乗って、上の能力検査室に向かう。

その途中に学園都市で研究されている超能力と、小波と紗矢香が持つ力について話していた。

「お前さんが持っている力は投げる物や持つ物に火や光などの属性を付与して常識外れの力を発揮する事で、お嬢さんの方は自身が願った事が起きる確率を変動させる事じゃったな？」

「はい、そうです。最初は光属性しか投げれなく、使える回数も限りがあつたんですけど、長年の訓練で全属性を使いたい時に使える様になりました」

「私も似た様なものです。『運命の三時間』が終わった後はしばらく徐々に能力が弱まっていたんですけど、栄一さんがまた魔球を投

ビルの上の階にある能力検査室に入った二人は黒野博士からこの学園都市における超能力について説明を受けていた。

「パーソナルリアリティーですか？」

普段聞かない単語に小波は首を傾げる。

どうやら紗矢香の方もよく理解できていないみたいだ。

「そうじゃな・・・簡単に言えばシュレディンガーの猫になるんじゃない。少々難しい話になるがこの学園都市では量子力学を超能力が発現する理論としており、能力者は『自分だけの現実』即ちパーソナルリアリティーよって能力を実現させている。例えば此処に一本のボールペンがある。」

黒野博士が胸ポケットから一本の黒いボールペンを取り出してみせる。

「これを此処にある何も入っていない引き出しの中に入れる。さて、此処には何が入っているかね？」

自分達に見えない様に部屋の端にある引き出しに黒野博士はボールペンを入れる

「ボールペンじゃないんですか？」

何を当たり前の事を聞いてるんだ？と小波は思いつつ言うが、

「違うぞい。ここに入ってるのは鉛筆じゃ」

「でもさっき入れましたよね？」

紗矢香が確信を持って聞くと、黒野博士は不敵な笑みを浮かべる。

「そう思うじやろう？じゃが、もしかしたらわしが入れたフリをしていたり嘘を付いている可能性がある。ボールペン50パーセント、鉛筆50パーセント。開けて確認してみなければはつきりと分かん。そしてこの中に別の物が入っていると思っただ者がいたらどうなる？そしてその可能性を信じてソレを手に入れたら？」

黒野博士の説明に大体理解できた二人はこの世界の超能力とはどういうものなのか知る。

「まともな現実から切り離され、自分だけの現実を手に入れた者を此処では超能力者と呼ぶ。まあ、ワシからしてみれば脳開発で起こる人為的な脳障害みたいなものじゃ。」

あまり興味無さそうに言うが、黒野博士の眼に映る二人に対しては興味深そうにしている。

「そしてこの世界にはお主らと同じ様に自然に能力へと目覚めた者もいる。そやつらの事を此処では原石と呼んでおる。お主らはこの世界では五十人前後しか確認されていない原石じゃ。特にお嬢ちゃんの方は高レベルの能力者の可能性が高いからのう」

「こちらにも超能力のレベルがあるんですか？」

超能力のレベルの話をされて小波はフィンチーズのファーストだった少女・上守阪奈を思い出す。

世界滅ぼすほどの圧倒的力を秘めた世界最強の超能力者ピースメーカー
カー エントロピーを操る彼女の力は星をも滅ぼせる生きた核兵器そのものだ。

だがコントロールが一切できずに幾つもの研究所を消した為に封印されていた所を元ツナミグループ会長・神条紫杏の極秘命令により、当時紫杏の秘書だった上守甲斐と世界最強の第三世代サイボーグ犬井灰根によって不器用ながらも愛されて育てられた少女。

現在は自身の力を少しずつコントロール出来る様になって、ヒーローの一人として世界中で人助けをしている。

そして今でも野球を続けてファーストをしている。

「分かりやすく言つとじゃな・・・おい！ちよつとアレを持って来い！」

「了解でバッタ！」

黒野博士が言つと立花が敬礼して能力検査室を駆け足で出て行く。

どうやらアレで解るほど彼らの絆は深いみたいだと二人は感心した。

そしてすぐに立花は大きなホワイトボードを持って戻って来て博士の横に置くと、黒野博士は簡単にレベルなどについて簡単に書き始める。

無能力者（レベル0）

測定不能や効果の薄い力。

低能力者（レベル1）

スプーンを曲げる程度の日常では役に立たない力。

異能力者（レベル2）

レベル1とほとんど変わらない程度の力。

強能力者（レベル3）

日常生活において活用可能で、便利と感じる力。

大能力者（レベル4）

軍隊において戦術的価値を得られる程の力。

超能力者（レベル5）

単独で軍隊と戦える程の力。

絶対能力（レベル6）

「神の領域の能力」。

「そして最後に超能力者達最後の到達地点である『SYSTEM』、神ならぬ身にて天上の意思に辿り着く者。これを入れればレベルは全部で八つ何じゃが、この都市の表で認知されているのは超能力者（レベル5）の七人までが最高レベルじゃ」

そして次に黒野博士は現在確認されている超能力者（レベル5）の序列・能力者名・能力名を書く。

それを小波と紗矢香は興味深そうに見た。

第一位・一方通行（本名不明）

アクセラレータ

・一方通行

- 第二位・垣根帝督・ダークマター未元物質。
- 第三位・御坂美琴・レベルガン超電磁砲。
- 第四位・麦野沈利・原子崩し（メルトダウン）。
- 第五位・食蜂操祈・メンタルアウト心理掌握。
- 第六位・不明・不明。
- 第七位・削板軍覇・名称不明。

何故か不明の部分があるが、特に気にするような事ではないと言われて気にするのをやめた。

「絶対能力者（レベル6）は居ないんですか？」

「……………現在のところは居ないな。超能力者（レベル5）を保有している研究所は絶対能力（レベル6）を生み出そう躍起になって馬鹿な事ばかりしておるが、表では上手くいかず認知されておらん」

「表では？」

表では認知されていない？

ならば裏では絶対能力（レベル6）が居る事になる。

怪訝な顔で博士を見るが、博士は顎に手を当てて考えると、

「とりあえず今から能力検査をして終わってから話そう。ウチの研究所に所属している能力者達についてもな……………よし、お前さんだけこっちに来い」

黒野博士に付いて行って小波は能力検査室の奥の部屋に入る。

中には色々な計測器具が置いてある縦長に広い部屋だった。

「まずはお前さんの能力検査からじゃ、そこにワシの助手が野球の硬球を用意しておいたから、ソレを思いっきりワシの言う通りに投げてくれ」

そう言うと黒野博士は部屋から出て行くと、突如博士が出て行った方の部屋の壁が全てクリアになる。

お互い声は聞こえないが、しっかりと様子が見える向こうの部屋ではさつき出て行った黒野博士と青い飛行帽を被った見知らない一人の少年が紗矢香達と共に小波の能力検査を見ている。

博士の仲間か助手か？と思ったが後で聞けばいいと思って目の前の事に集中する。

すると部屋のスピーカーから博士の声が聞こえてきた。

『これよりお前さんの能力テストを行う。まずは普通に本気でアレに投げてみてくれ』

博士が言い終わると、小波から十メートルほど離れた位置にネットみたいな物が現われる。

「そういえば、近頃どれだけスピードが出るのか測っていなかったな。丁度いいから測ってもらおうか！」

野球の硬球が沢山入ったカゴからボールを一つ取ると、小波は肩慣らしに肩を回してから振り被って全力で投げた。

一筋の流星の如く空を走る硬球はネットのど真ん中に命中すると、奥へと伸びていき、最後にはボールを押し戻した。

どうやらあのネットは受け止めた物の力を測って押し戻す緩衝材みたいな働きがある様だ。

『球速157キロじゃな。まだ高校一年じゃというのに大したもんじゃ』

『当然だよ！栄さんは私のヒーローなんだから！』

紗矢香の自慢気な声が聞こえて思わず恥ずかしく思うが、それはそれで小波は前に測った155キロを更新できてほっとしていた。

『次は魔球を頼む』

「はい」

返事を返すと小波はカゴからボールを取って振り被り、頭の中でボールに力を全て込める様にイメージを行い、手に光や力が集まっていく様な感覚を感じながらいつものフォームでボールを投げた。

手からリリースされた硬球は光線の様に真っ直ぐな軌跡を残してネットのど真ん中に当たる。

普通ならまた押し返されて終わる筈なのだが、今回は普通ではない。ネットに突き刺さったボールは貫通してその向こうにある壁へと突き刺さった。

「えっ？」

想像以上の破壊力に思わず小波は啞然とした。

元の世界ではどんなに力を込めてもあんな事にはならなかった筈なのだが……………。

『球速測定不能じゃ』

能力検査室に黒野博士の声が響いた。

第1話 超能力 (後書き)

近い内に全て改稿してみようと思います。
前に投稿した時に小説じゃなく台本だといわれましたので。

第2話 学園都市（前書き）

主人公の三人のメガネパパ達を出そうと思っ
てますが、どう思いま
すか？

第2話 学園都市

能力検査を終えた小波と紗矢香は黒野博士から能力検査の結果を聞いていた。

「お前さんが強能力者（レベル3）でお嬢ちゃんが超能力者（レベル5）じゃな。後でちゃんと申請しておくからもうええぞ」

黒野博士がさつき採った能力検査の書類を見ながら言うが、小波と紗矢香は能力検査で見せた自分の力について考えていた。

自身が今まで使ってきた魔球や魔法は信じられない位に威力が上がっている。

もし人に向かって投げたら殺しかねない。

小波は能力テストを行った部屋の端の壁にめり込んでいる幾つ物ボールと、魔法によって粉々に砕かれた緩衝材を見て思わず震えた。

「……………栄一さん」

いや、自分の力など大したものじゃない、と思いつつ紗矢香を見る。

彼女は自身の力に不安を感じているのか顔を曇らせている。

能力テストで見せた力は元の世界のソレを遥かに超えていた。

紗矢香の能力は『自身の願った事が起きる確率を変動させる』という人が生まれ持つ運勢を操るものだ。

元の世界では宝くじや福引きなどで一等を確実に当てたり外したりなどができたが、それらは彼女の能力の副産物にすぎない。

彼女の本領は願った事が確率で超常現象でも起きる事だ。

かつて彼女は世界の危機に自分と共に立ち向かってくれるヒーローだと小波の事を信じて一緒に平和な街の中を探検している時に『本物の化け物が現われればいいな』、と思った時に本当に二人の前に化け物が現れて小波は全治八週という大怪我を負った。

原因が自分の力のせいによるものと解って彼女は罪悪感で沈み込んだが、小波の熱意によって再び超能力の訓練を始めた。

その結果、彼女は自分の意思で超常現象を起こせるまでになった。

『運命の三時間』の後は徐々に能力が弱まっていたが、小波が再び魔球を投げた時期辺りから彼女の力も徐々に戻っていき、現在は自身の思うままにコントロールできるが、無意識の内に使っている事がある為にブレスレット型のESPジャマーを常に着けている。

そして、こちらの世界に来て能力検査を試みたが紗矢香の超能力はこちらで言う超能力者（レベル5）だった。

どんなに複雑なクジであろうとも任意に大当たりを引き当て、目の前で超常現象が起こる確率を上げる事でブラックホールが現われたり、空間がひび割れたりなどした。

実験で元気なモルモットが今すぐ死ぬ事を願って確率を上げたら、モルモットは突如心臓停止して死んだ。

もはや運命干渉系の超能力だ。

どんな強い敵であろうとも運が無ければ生きていけず、寿命や病気には勝てない。

思った相手の死ぬ確率を上げてやる事で彼女はどんな相手だろうと殺せる。

モルモットが死ぬ瞬間を見た時の彼女の血の気が引いた顔は忘れられない。

そんな二人を見ていたたかゆきと立花は顔を見合わせると頷いた。

「ところで能力名はどうするんだ？」

「それでバッタ！折角の能力でなんだから名前を付けるべきでバッタ！」

暗くなっている二人の話題を変えようと話しかけるロボットとバッタ人間。

二人の心遣いに気付いた小波は感謝しつつ話に乗る。

「そうだな・・・なんかかつこいい名前はないかな？」

紗矢香に話を振ると、戸惑いながら必死に彼の能力名を考える。

「え、え〜と・・・エレメントフォーム属性球児とかいいんじゃないかな？」

「うん・・・ちょっとありきたりなネームでバツタ」

「別にシンプルでいいんじゃないか？なあ、坊主？」

「うん。確かに色々な種類の属性が使えるからな。俺は良いと思うよ」

特に自分でも良い能力名が思い浮かばない小波は彼女が考えてくれた属性球児を自身の能力名にした。

「そこで次は嬢ちゃんの能力名だな」

「学園都市のトップ8になるんだからカッコいい能力名を考えるでバツタ！」

「確か他の超能力者（レベル5）って超電磁砲とか一方通行とかだつたよな・・・」

ついでさつき教えてもらった超能力者（レベル5）の能力名を思い出しながら小波は紗矢香の能力名を考える。

すると書類の整理を終えた黒野博士がやって来て、

「運命掌握ファミリアタルというのはどうじゃ？フランス語で運命の女という意味じゃが」

「あ、それ私にぴったりかも」

「確かにいいんじゃないか？」

いた。

ちなみに隣で手を繋いで歩いている紗矢香は神桜女学院中等部の制服だが、小波はいつも着ている白と赤の野球ユニフォームではなく、博士の助手を名乗る飛行帽を被った少年が用意してくれた服を着ていた。

『制服ならともかく、野球ユニフォームなんかで出歩く不審者なんか学園都市にはいねえぞ』とロボットのたかゆきに言われてご尤もだと認めざるを得ない。

今の小波の服装は白と赤の長袖シャツに白いズボンと赤いジャケット。

頭には自身が通っている高校の野球部の野球帽を被っている。

自身が着ていたユニフォームと似た配色の服を用意してくれたのは、用意してくれた少年の気遣いだろう。

それでも今まで人生の大半を野球ユニフォームで過ごしてきた小波にとつて、私服というのは極めて新鮮に感じるが何故か落ち着かなかった。

「どうしたの栄一さん？」

隣を歩く彼の落ち着きの無さに気づいた紗矢香が不思議そうに小波を見つめる。

「いや、ユニフォーム以外の服なんて滅多に着ないから落ち着かないんだよ……」

「あ、確かに私服姿なんて初めて見たかも」

紗矢香自身も三年以上の付き合いだが、彼の私服姿を見た事が無かった。

何でも彼の父親の一人が「何事も形から入るのが当たり前でやんす！」と言って野球ユニフォーム以外着せて貰った事が無いと言っていたが、改めて彼の家がどれだけ異常だったのか分かる。

「それにしても、黒野博士って怖そうなお見してるけど善い人だよな」

「そっだよな、初めて会った時に私って悪の組織に捕まったんだと本気で思っちゃったもん」

二人は黒野博士達と初対面した時の事を思い出す。

「ワハハハハ！ようこそ我が秘密基地へ！この世の真理を探求せんとする悪の天才科学者、黒野鉄斎とはワシの事よ！」

「オレの名前はたかゆきってんだ！よろしくな！」

「俺の名前は立花ボボV3っていうのでバッタ！以後よろしくでバッタ！」

種族が違い、個性の強過ぎる三人。

恐らく彼らとの出会いは一生忘れる事は無いだろう。

「そういえば・・・もう何人か仲間が居るって言ってたよな？」

秘密基地から出る直前に小波は博士から「帰ったらワシの家族と仲間を紹介するぞい」と言う言葉を思い出して紗矢香にも確認のため聞いてみる。

「名前とかはまだ聞いていないけど、あの飛行帽を被った人が言うには後二人いるんだって」

「後二人もか・・・多分博士の仲間だから変な個性が強いんだろうな」

「あははは・・・恐らくね」

なにセロボットに怪人がいるのだ、もしかしたら魔法使いやモンスターが居てもおかしくないかもしれない。

「それにしても本当に学園都市なんだな・・・若い学生ばかりだ」
道ですれ違う人などを見るが、大人が少なく制服を着た子供が多い、と小波は思う。

「本当だよね、清掃ロボや警備ロボが所々にいるし。私達の世界と同じ位に科学が進んでるんじゃないの？」

紗矢香は街の所々に居るドラム缶みたいな形状のロボットを見て小波に聞くが、小波は首を横に振った。

「いや、少なくとも科学力は俺達の世界の方が少し進んでるよ。超能力はともかくとして、世界のエネルギーバランスを変えたワギリ

買い物も大体終わって、日も暮れてきた。

街中には下校する学生などが見える中、小波は公園でベンチに座ってくつろぎながら紗矢香を待っていた。

これから学園都市で暮らしていくうえで必要な日用品を買い終えたのだが、その際に店から福引券を数枚渡されたのだ。

自分の力を試すには丁度良いと思って紗矢香は、今日一日荷物持ちをしてくれた小波に此处で待っている様に言って福引場へと向かった。

「絶対に大当たりを当てて来るから待っててね！」

自信満々に言った彼女の事だ、間違いなく特等か一等を当ててくるだろう。

そう思いつつ小波はスーパーで買った紙パックのムサシノ牛乳を呑気に飲んでいた。

「何か身体を動かしかないと落ち着かないな」

手で野球の硬球を弄びながらこれからの練習とかどうしようとか小波は考える。

元の世界では野球部での練習は勿論、実家でのカンフー映画みたいな練習場があったおかげで野球の練習には困らなかった。

だが学園都市には持って来た野球道具と着ていた練習着しかない。

黒野博士に何か作ってもらおうかな、などと危ない事を考えているときだった。

「ええい！ちくしょう、不幸だ〜っ！！」

という若い男の大きな嘆き声が聞こえて小波は振り向くと、黒い学生服を着たツンツン頭の同い年位の少年が柄の悪そうな輩達に追いかけられている。

その数は実に八人。

少年は逃げ足も速く逃げ慣れているのか男達は捕まえる事が出来ずにいる。

だが、柄の悪い輩の数は揃っているのだから当然捕まるのも時間の問題である。

すぐに回り込まれた少年は柄の悪い連中に取り囲まれた。

恐らくあのままだとリンチされるだろう。

「しょうがない。どっちが悪いのか確かめてから助けてやるか」

ベンチから立ち上がって、飲み終わった牛乳パックをゴミ箱に捨てると小波は拳を鳴らしながら少年達の元へと向かった。

「へへへへ。ようやく追い込んだぜ」

「お兄さん達、ちょっと小遣いに困ってるからお金くれたら許してあげるかもよ」

追い込んだ獲物に対して絶対的な優位を感じている男達は上条を見下した目で見て言う。

だが上条は開き直った様に堂々と男達にビシッ！と指を突きつけて言い放った。

「誰がお前らなんかにやるかよっ！金が欲しいんならアルバイトでもして手に入れるよ！上条さんにはな、弱い奴から金を巻き上げよ」とする捻くれた奴らに渡す金なんか無いんだよ！」

(あいつ言うな〜！？)

影で上条の堂々とした姿を見ていた小波は今時珍しい正義漢だと感嘆しながら内心拍手しつつ彼らに近付いた。

「そいつの言う通りだ。金が欲しいんならちゃんと働いて自立してから言えよ」

突如現われた少年を上条は怪訝な顔で見る。

赤いジャケットに白いズボンの同年代位の少年。

頭には白赤の野球帽を被り、短く刈った黒い短髪に強く熱い意思を感じさせる眼差しをした、それなりに整った顔立ち。

背は170後半位で高く、スマートだが引き締まった体をしている。

「なんだてめえは？」

「こいつと同じ正義の味方気取りか？」

柄の悪い輩達全員の目付きの悪い視線が小波に集中するが、小波はこの程度の奴らに物怖じする男ではない。

生まれてすぐに三人の父親から野球にあまり関係ない様な英才教育を受けており、父親の中でも武闘派の落田からは喧嘩の仕方などを教わっている。

おまけに十二歳の時に真正正銘の殺し合いに自ら参戦して、ジオツトの部下である第四世代サイボーグ・マゼンタやジナンダに殺され掛けた事もある。

余談だが中学生の時に行われた野球の合宿で、合宿地の小森寺ではなく少森寺という『漢たちが己の精神と肉体を極限まで鍛え上げる地上最強の場所』に間違っ入ってしまい、四十日の修行を無理矢理課された事もある。

その際に寺門男を始めとした師匠達にしごきにしごかれ、最終日に行われた少森寺八連闘を命懸けでクリアして生還した。

それを聞いたホンフーから野球をやめて弟子にならないかと言われた事すらもある。

勿論断つたが。

まあ、単刀直入に言えば小波はたかが不良程度に負ける事はない。

「俺はあの人達と違ってヒーローなんて大層な存在じゃない」

ヒーローという言葉は世界中で影から人助けをしている阪奈やブラックさん達に相応しい。

「俺はただの野球少年だ」

不敵な笑みを浮かべながらそう言うと小波は動いていた。

先手必勝！相手が反撃する間も与えない。

両手両足を思いっきり使って蹴って殴って、一人一人を確実に一撃で戦闘不能にしていく。

全員が倒れるまで十秒も掛からなかった。

「おい！誰か来る前にズラかるぞ！」

余りの強さに上条は呆然としていたが、声をかけられてすぐに我に返った。

「お、おう！ありがとな！」

上条はその場から立ち去ると、小波も紗矢香が待っているかもしれない公園へと戻っていった。

福引のお姉さんがしょんぼりとする少女に残念そうに声を掛けると、少女は福引場からとぼとぼと去って行こうとするが、紗矢香は苦笑しつつ少女の腕を取った。

「ちょっと待ってください。これから私が福引をするんですけど、もしかしたら引き当てちゃうかもしれないので、その時は貰ってくれないませんか？」

「え、いいの？」

頂垂れていた少女は顔を上げて紗矢香を見る。

「はい、勿論！」

紗矢香は笑顔でそう言うつと福引券を二枚、福引のお姉さんに渡す。

少女が期待を込めて見守る中、紗矢香は右手首に着けたブレスレット型のESPジャマーをOFFにすると自身が五等を引き当てる確率を念じる事で極限まで高めて福引のガラガラを回す。

三回転させた時だった。

ガラガラから赤い玉が出てくる。

赤い玉は五等、すなわち景品は少女の求めるゲコ太抱き枕。

それを見た福引のお姉さんは「当たりです！」鈴を鳴らし、少女は喜びのあまりに紗矢香に抱き付いた。

「やったあ〜っ！ありがとうございます！」

「いいえ、運が良かっただけですから」

こうして少女は目的の品を受け取り、紗矢香は次の福引で二等の豪華絢爛すき焼きセットを引き当てた。

「本当にありがとうね！あ、そうだ自己紹介がまだだったわね、私は御坂美琴。常盤台中学の二年生よ」

茶髪の少女、御坂美琴は機嫌良さそうに自己紹介すると、紗矢香と握手する。

「私の名前は天月紗矢香です。紗矢香って呼んでください。今度常盤台中学に転入する事になっている一年生です」

「なら私の後輩ね！何か困った事があったら何でも言ってね、このお礼は必ずするから！」

美琴が握手しながら軽くウインクすると、紗矢香は微笑みながら頷いた。

「はい、宜しくお願いします御坂さん」

「それじゃあまたね！」

手を振って去って行く美琴を見届けると、紗矢香は景品を持って小波が待つ公園へと嬉しそうに笑顔を浮かべて戻って行った。

第2話 学園都市（後書き）

主人公と紗矢香が強すぎると思いかもしれませんが、これ位じゃないとチート共相手に生き残れない様な気がします。

それと今の時期ですが、上条や御坂が進級したばかりの春です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0565ba/>

とある野球少年の異世界目録

2012年1月6日01時51分発行